



研究論文 (Articles)

社会人経験看護学生の学びの特徴

——ヴィゴツキー・トライアングルと動的記号過程の文化心理学による考察——¹⁾

伊 東 美智子・土 元 哲 平

(神戸常盤大学保健科学部看護学科・立命館大学 OIC 総合研究機構)

Nursing Students' Learning Characteristics After Work Experience in Their Clinical Field Training: Using the Vygotsky Triangle and the Cultural Psychology of Dynamic Semiosis

ITO Michiko and TSUCHIMOTO Teppei

(Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kobe Tokiwa University ·

Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University)

This study aims to clarify the practical aspects of the work experience of nursing students that are of use to them later in their clinical field training. Using the Life Story Interview method, 9 students who had previous work experience and 9 nurses who had been working for less than 4 years were interviewed. Apart from asking basic questions, such as about their age, we asked them to identify the parts of their work experience that were useful/not useful to them in clinical field training. Students with work experience revealed that their previous experience proved to be useful in pregnancy/childbirth, child-rearing experience, and geriatric nursing as it requires use of common skills and attitudes. By placing experience in the position of the sign and tool in the Vygotsky Triangle, the process by which students with work experience understand nursing and practice nursing on patients are explained in the study. Students also noticed an additional two points: the need to reflect on their experience and reconstruct it (They reflected on how they worked and communicated differently in their previous jobs.). This distinction of their sign can be explained by Valsiner's cultural psychology. It is significant for educators to recognize that the act of deep reflection is an essential support process for the reconstruction of students' experiences.

本研究は、社会人経験看護学生が臨地実習において用いる経験の実態を明らかにすることを目的とした。ライフストーリー・インタビュー法を取り入れ、現役社会人経験学生9名と卒業後4年未満の社会人経験看護師9名にインタビューを行った。年齢等の基本項目とともに、これまでの経験で、臨地実習で活かしたこと・活かせなかったこと、について尋ねた。その結果、社会人経験学生が経験をそのまま活かした看護の学びには、【妊娠・出産、子育て経験が活きる】【高齢者看護が入りやすかった】【前職と共通する技術や働く姿勢は活かす】の3つがあった。これらのカテゴリーについては、ヴィゴツキー・トライアングルにおける記号・道具の位置に経験を置くことで、社会人経験看護学生が看護を理解する際や患者への看護実践をする際のプロセスを説明することが出来た。また、学生が経験を反省し再構成する必要性に気付いた語りとして、【これまでと違うコミュニケーション】【前職での仕事ぶりを思い返す】の2つがあった。これらから、反省の重要性と経験の種類をヴァルシナーの記号論的文化心理学を用いることで説明ができると考えた。看護教員は、社会人経験学生が経験の再構成を図るための反省の重要性について認識する必要がある。

Key Words : Students with working experience, Cultural psychology, Vygotsky triangle, Reflection,

Cultural psychology of dynamic semiosis

キーワード：社会人経験学生, 文化心理学, ヴィゴツキー・トライアングル, 反省, 動的記号過程の文化心理学

1) 本研究は2020年度基盤研究(C) 科研費20K02471の助成を受けた研究の一部である。

I. 緒言

3年課程の看護師養成所（以降、看護学校）に社会人経験を経た後の入学者（以降、社会人経験学生）が一定数存在する。一般社団法人日本看護学校協議会が会員校に対し、2012年度に行った「看護師等養成所の管理・運営等に関する実態調査」の結果では、看護師養成所（3年課程）における社会人経験者の割合（社会人経験者数／学生総在籍数）は23.7%であった。厚生労働省政府統計 e-Stat で看護学校の入学時年齢を確認しても、20歳以上の入学者は2012年以後2020年まで、2割前後を維持している。

このような入学者の状況を受け、看護学校における社会人経験を対象とした研究も並行して取り組まれてきたが、2010年以降急増している（島田・鈴木、2014）²⁾。それら先行研究の多くが、社会人経験学生の学びに焦点を当てているが、学生と看護教員（以降、教員）では見解が異なっていた。その理由としてまずは、渡邊・鈴木・常盤（2013）が明らかにした、教員による社会人経験学生の学びに対する見解から紹介する。ここでは教員が指導に困難を感じる側面として、【経験に基づいた学習】〈柔軟性が乏しい〉、〈経験に頼る傾向〉、〈強い価値観〉、〈興味の特化〉、〈ゆっくりな成長〉が導出された³⁾。具体的には「社会人でやってきたいろんな経験が邪魔になっている」等と語られていた。これは、社会人経験学生の経験に頼る傾向と、その経験が看護を学ぶ上でマイナスになっていることを示している。

一方、社会人経験学生を対象とした研究として、高橋（2013）がある。この調査は社会人経験をもつ看護学生1～3年生が、看護学校生活の中でどのような体験をしているのかを明らかにしている。ここでは社会人経験学生から【経験の役立ち】が語られ、〈報告・連絡・相談〉〈質問するタイミング〉〈患者のイメージが付きやすい〉〈病名、疾患に対する知識〉〈介護の知識、経験〉がサブカテゴリーとし

て見出された⁴⁾。ただし、介護の知識・体験がどのように活かされたのかまでは具体的に述べられていない。

さらに、看護教員と社会人経験学生との比較研究によって、教員と学生が持っている経験に対する認識が異なることが明らかとなっている。例えば、三木・關戸・檀原（2015）では、教員と社会人経験学生の比較調査がなされた（4件法）。そこで得られた社会人学生と教員の得点の平均値を比較したところ、①社会人経験学生はこれまでの経験が看護の学習にプラスになっていると感じているが、②教員は社会人経験学生の経験を看護の学習にはマイナスだと捉え、③専門的な看護の知識や技術と、社会人経験学生が経験の中で身につけたものとの間にズレが生じている、といった結果が示された。

別の教員と社会人経験学生の比較研究では、教員が抱く【社会人学生に対する否定的評価】の中に、《社会経験がある分看護学生としてはマイナスだと感じる》ことが見出されている⁵⁾（片山・鈴木（谷保）・長谷川、2017）。一方の、学生の意識には【自己肯定感】が見いだされ、《社会経験は看護師を目指している自分にプラスに作用している》と語られていた（片山・長谷川、2017）。

以上を踏まえて本研究では、看護学生生活の中でも臨地実習場面に焦点を絞り、社会人経験学生が看護を学ぶ上で用いる経験の実態を明らかにする。具体的には、まず社会人経験学生の語りの中から、それまでの経験（特に社会人経験）でそのまま看護に活かしたものはどのようなことであり、また、それまでの経験が活かせなかった場合についてはどのように対処したのかを見出す。そして、ヴィゴツキー・トライアングルおよび動的記号過程の文化心理学の視点から、社会人経験看護学生の学びと反省のプロセスについて考察を深める。

II. 研究目的

社会人経験学生が臨地実習における社会人経験の活用の適否を明らかにする。具体的には、社会人経

2) 研究の増加理由を島田らは、若者の就職難が浮き彫りにされた時期と一致し、一度退職または転職して次の仕事への転換期に看護師を選択したことが伺えるとしている。

3) 【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー名を示す。

4) 【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー名を示す。

5) 【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリー名を示す。

験学生が臨地実習において受け持ち患者への看護を学ぶ上で、妊娠・出産、子育てや前職からの経験がどのような役割を果たしているのかを確認し、ヴィゴツキー・トライアングルと動的記号過程の文化心理学を用いて考察する。

Ⅲ. 用語の定義

社会人経験：社会に出て働いている個人であり民間企業等におけるパート・アルバイトを含む、看護職以外の就業経験と、妊娠・出産や子育てや家族の介護などのライフイベントに伴う経験。

社会人経験学生：社会人経験を経た後に看護師を目指して養成機関に進学し、現在学んでいる看護学生。

社会人経験看護師：社会人経験学生を経て看護師となり、現在勤務している看護師。

ストレート学生：高校卒業後、直ぐに看護学校に進学した学生。

Ⅳ. 方法

1. 研究手法

ライフストーリー・インタビュー法による、質的記述研究を行う。ライフストーリー・インタビューとは、「語り手が人生における経験をどのように意味づけるかに迫る方法」である（川島, 2018）。ライフストーリー・インタビュー法を取り入れた理由は、本研究が個人的な出来事を扱うためである。また、個人的経験から社会人学生が何を学んでいるのかを明らかにしたいからである。したがって、「個人の主観的な観点から経験の意味づけや人生の様相をとらえることが重要である（徳田, 2004）」とする、本研究法を用いることに意義があると考えた。なお、インタビューは半構造化面接を行った。

2. 研究協力者

現役社会人経験学生と看護師養成機関卒業後4年未満の社会人経験看護師とした。ただし、本研究では看護師養成機関を3年課程の看護学校に統一した。理由は、社会人経験学生の大半が3年間で資格の取れる看護学校に進学するためである。看護師養成に

対しては、国からの専門実践教育訓練給付の対象となっているが、学生が指定（入学許可）を受けてからの給付の資格有効年限が3年となっている。これにより、社会人経験学生の進学先として4年制大学ではなく、3年課程の看護学校が選ばれる傾向にある。

3. 協力者のリクルート

ネットワークサンプリングを用いた。看護学校での勤務経験のある研究者（第1著者）の同僚教員の紹介や、研究者自身の知り合いの医療関係者を通して、まずは研究協力の可否の打診を所属機関の管理者に行った。その結果、研究協力への承諾を得られた機関より本研究の協力者として条件に該当する人を推薦してもらった。その後、研究者が協力者と個別に会い、研究説明に進んだ。

4. データ収集方法

1) データ収集およびインタビュー・ガイド

調査日時はインタビュー協力者の希望日時と調整し、研究協力者が在学する学校や勤務する医療機関の面談室など、静かでプライバシーが守られる場所を借用した。インタビュー時間は30～60分程度とし、その内容をICレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。インタビューの内容の録音については、事前に協力者の許可を得た。インタビュー内容は、①年齢等の基本項目、②これまでの経験で、臨地実習で活かしたこと、③これまでの経験で、臨地実習で活かせなかったこと、とした。

2) データ収集期間

2018年7月中旬～2019年3月中旬にインタビューを実施した。

3) データ分析方法と妥当性

質的記述的分析の手法を基に以下の手順で行った。まずは逐語録を作成、熟読した後、文脈ごとに短文化して整理し、コード化した。その後、社会人経験学生が看護を学ぶ中でこれまでの経験をどのように用いているのかを文化心理学に基づき分析した。特に、文化心理学者レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー（Лев Семенович Выготский）による「ヴィゴツキー・トライアングル」の考え方を参考にした。

ヴィゴツキーは旧ソ連の心理学者であり、ゲシュタルト心理学者ヴォルフガング・ケーラー (Wolfgang Köhler) によるチンパンジーを対象とした洞察研究 (チンパンジーの知恵試験) をヒントに、記号論的文化心理学を構想した人物である (サトウ, 2015)。ヴィゴツキーは三角形を用いて、「記号は客体と主体のあいだに道具として置かれる」(神谷, 2006) ことを示し、客体となる目的を達成するために、主体は記号を道具として用いることを指摘した。この図 (図1) はヴィゴツキー・トライアングルと呼ばれ、人間の行為の最小単位として心理学だけでなく、保育や社会福祉の分野でも広く知られる考え方である。

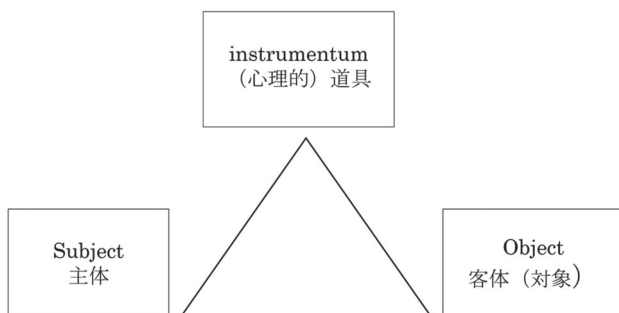


図1. ヴィゴツキー・トライアングル：神谷 (2006) を一部訳出

この考えをもとに、社会人経験学生 (主体) が臨地実習において受け持ち患者 (対象) への看護を提供する上で、妊娠・出産、子育てや前職からの経験がどのような役割を果たしているのかを、語りの分析より確認してゆく。その結果、社会人経験学生の学びの特性を明らかにすることを目指す。なお分析過程において、質的研究と文化心理学を専門とする研究者 (第2著者) との討議および文化心理学に精通している研究者からのスーパーバイズを受けて厳密性を確保した。

5. 倫理的配慮

神戸常盤大学 研究倫理委員会の承認後、研究を行った (神常大研倫第18-02及び18-06号)。事前に研究協力の承諾を得られた教育機関や医療機関の管理者 (副学校長等や看護部長) を通し、協力者向けの研究説明書類を届けた上で、協力者本人から研究者に電子メールで連絡をもらい、インタビュー

日時や場所を調整した。インタビュー初日の冒頭、調査趣旨と協力は自由意思であり中断の自由も確保されていること、回答したくない内容には答えなくても良いこと、調査協力をしなくても不利益を被らないこと、インタビュー内容は本研究の目的以外には使用しないこと、同意書を含む紙媒体や収集したデータは鍵付きの棚で厳重に保管すること、研究終了後に本調査で得たデータは破棄し個人が特定されないようにすること等を、口頭と文書で説明し同意を得た。

V. 結果

1. 研究協力者の概要

協力者は現役社会人経験学生9名 (男性1名、女性8名) と看護学校卒業後4年未満の社会人経験看護師 (男性3名、女性6名) 9名である。年齢は20～40歳代である。前職の分類は総務省の職種 (職業) 分類コード表に則った。協力者には、個人情報保護を目的で、ID番号を付与しどの協力者の語りかわかるようにした。ID番号の付け方としては、社会人経験看護師は最初にN、社会人経験学生はSを付けた後、協力者ごとに数字での番号を付けた (表1)。

2. 社会人経験学生の語りから抽出した、経験をそのまま活かし看護を学んだ語り

社会人経験学生へのインタビューの結果として、経験をそのまま活かして看護を学ぶ様子が語られた。具体的なインタビューの語りから、【妊娠・出産、子育て経験が活きる】【高齢者看護が入りやすかった】【前職と共通する技術や働く姿勢は活かす】という3つのカテゴリーが形成された (表2)。本節ではこれらのカテゴリーについて詳述する。以下、サブカテゴリーを<>、コードを「」で示しながら述べる。

1) 【妊娠・出産、子育て経験が活きる】

協力者の語りから、自身の妊娠・出産・子育て経験を臨地実習でうまく活用した様子が見いだされた。これらを【妊娠・出産、子育て経験が活きる】カテゴリーと命名した。この下位カテゴリーとして、<母性看護は妊娠・出産経験と照らし合わせながら

表 1. 研究協力者の属性

協力者	進学時の年齢	性別	卒後年数	前職の分類	協力者	進学時の年齢	性別	在学年	前職の分類
N1	30代前半	男性	卒後3年目	小売→社会福祉	S1	20代後半	女性	3年生	小売
N2	30代前半	男性	卒後3年目	情報通信	S2	30代前半	女性	3年生	小売
N3	20代後半	男性	卒後2年目	サービス→製造→社会福祉	S3	20代後半	男性	3年生	教員
N4	20代後半	女性	卒後2年目	社会福祉	S4	20代後半	女性	3年生	社会福祉
N5	20代前半	女性	卒後2年目	社会福祉	S5	20代前半	女性	3年生	社会福祉
N6	40代前半	女性	卒後3年目	教育→医療→社会福祉	S6	20代前半	女性	3年生	保健医療
N7	30代後半	女性	卒後2年目	保健医療	S7	30代前半	女性	3年生	小売
N8	30代前半	女性	卒後4年目	宿泊	S8	20代前半	女性	3年生	保健医療、飲食サービス
N9	30代後半	女性	卒後3年目	飲食サービス	S9	40代前半	女性	3年生	保健医療→飲食サービス→社会福祉→サービス

表 2. 経験をそのまま活かし看護を学んだ語り

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	ID
妊娠・出産、子育て経験が活かせる	母性看護は妊娠・出産経験と照らし合わせて学ぶ	妊娠・出産をしてきているので、知識が定着しやすかった。	N4
		子どもへの関わり方は実際に子どもも育てていたのだから分かりますし、母親の気持ちも分かった。	S7
	小児実習では子どもへの関わりが容易であった	子どもも二人いるんで全然大丈夫だった。小児科とか保育園とか、楽しかった。	N1
		小児実習では、受け持ち患児が何が好きか、何に興味を持っているか、我が子が辿ってきた道なので活かすことができた。	N4
		小児看護学実習では、子育て経験を活かして学ぶことができた。	N7
		小児実習では子育て経験を活かし、思春期の子どもとの関わり方が褒められた。	N9
高齢者看護が入りやすかった	高齢者とのコミュニケーションは抵抗なかった	2-3歳の子達は一緒に遊んだりとか、ちょっとお世話したり、子育てしてたのでわかる。	S9
		介護福祉士をしていたときの経験で高齢者とのコミュニケーションは抵抗なかった。	N4
	高齢者と関わっていたので用語や病態が入りやすかった	高齢者施設で働いていたこともあって、コミュニケーションには困らなく、患者さんから私に悩みを打ち明けてくれた。	S8
高齢者と関わっていたので老年看護学とか認知症のこととか、身体の衰えとか授業がわかりやすかった。		S5	
前職と共通する技術や働く姿勢は活かす	看護助手という類似分野での経験	用語が自分の中に関連付けてスッと入って来やすかった。	S5
		産婦人科に勤務していたから、沐浴の準備等が早くできた。	N5
	前職でのスキルが役立つ	看護基礎技術は、ある程度のやり方は分かっており順序を覚えなくていいのが無かった。介護の経験があるからといって、変えないといけないことは特に無かった。	S6
		パソコンとかもプラスになりました。それらは介護士になる前の仕事で使っていました。	N1
		ホテルでハウスキーピングも行ってた。学校のベッドメイキングは直ぐにパスできた。	N8
分らないことは自分から聞く	実習に行って、分らないことはどんどん自分から教員に言いについて上手に聞き出す。	N9	
コミュニケーション力があるので、看護師さんや教員に聞きたいことを聞きに行けた。	S5		

学ぶ><小児実習は子どもへの関わりが容易であった>の2つのサブカテゴリーが構築された。

<母性看護は妊娠・出産経験と照らし合わせながら学ぶ>に位置づく語りとしては、「妊娠・出産をしてきているので、知識の定着がしやすかった。(N4)」と、経験を想起し学習にそのまま活用していることや、「子どもへの関わり方は実際に子どもも育てていたのだから分かりますし、母親の気持ちも分

かった。(S7)」という語りがあった。

また、<小児実習は子どもへの関わりが容易であった>に関して、2児の父でもある協力者が「子どもも二人いるんで全然大丈夫だった。小児科とか保育園とか、楽しかった。(N1)」と、父親業が役立った様子を語っていた。他の協力者の中には母親業の経験を学習に活用した者もあり、「小児実習では、受け持ち患児の世代に対して何が好きとか、何に

興味を持っているかとか、我が子が辿ってきた道なので活かすことができた。(N4)」、「小児実習では子育て経験を活かし、思春期の子供の関わり方が褒められた。(N9)」などが語られた。

2) 【高齢者看護が入りやすかった】

続いて、主に前職で高齢者と関わっていた経験を活かし、臨地実習での学びや講義内容が頭に入りやすかった様子が語られていた。これを、【**高齢者看護が入りやすかった**】カテゴリーと命名した。この下位カテゴリーから、<高齢者とのコミュニケーションは抵抗なかった><高齢者と関わっていたので用語や病態が入りやすかった>の2つのサブカテゴリーが見出された。

<高齢者とのコミュニケーションは抵抗なかった>では、「介護福祉士をしていたときの経験で高齢者とのコミュニケーションは抵抗なかった。(N4)」や、「高齢者施設で働いていたこともあって、コミュニケーションには困らなく、患者さんから私に悩みを打ち明けてくれた。(S8)」など、高齢者とスムーズなやり取りが進められていた様子が語られていた。

<高齢者と関わっていたので用語や病態が入りやすかった>では、「高齢者と関わっていたので、老年看護学とか認知症のこととか、身体の衰えとか授業がわかりやすかった。(S5)」や、「用語が自分の中に関連付けてスッと入って来やすかった。(S5)」など、高齢者への介護を通して見聞きしていた専門用語や症状と、学校で学ぶ内容が繋がることで理解が深まる様子が語られていた。

3) 【前職と共通する技術や働く姿勢は活かす】

続いて、看護学生として臨地で学ぶ中で必要なスキルを、多様な職業経験からそのまま活用している様子も語られた。これらを【**前職と共通する技術や働く姿勢は活かす**】と命名した。その下位カテゴリーとして<看護助手という類似分野での経験><前職でのスキルが役立つ><分からないことは自分から聞く>が、見出された。

<看護助手という類似分野での経験>では、「産婦人科に勤務していたから、沐浴の準備等が早くできた。(N5)」、「看護基礎技術は、ある程度のやり方は分かっており順序を覚えなないといけないのが無

かった。介護の経験があるからとって、変えないといけないことは特に無かった。(S6)」と、医療や介護現場で働いていた時の仕事内容に助けられていることが語られた。

<前職でのスキルが役立つ>では、異なる業種で習得したスキルが、看護の現場でもそのまま活用できたことが示されている。具体的には「パソコンとかもプラスになりました。それらは介護士になる前の仕事で使っていました。(N1)」や、「ホテルでハウスキーピングも行った。学校のベッドメイキングは直ぐにパスできた。(N8)」と語られた。

<分からないことは自分から聞く>では、前職等で培った知識や技術の活用ではなく、むしろ分からないことを自ら質問に行く様子が語られている。この様子は、具体的には「実習に行って、分からないことはどんどん自分から教員に言いについて上手く聞き出す。(N9)」や、「コミュニケーション力があるので、看護師さんや教員に聞きたいことを聞きに行けた。(S5)」といった語りに示された。

以上から、妊娠・出産、子育て経験と職業経験、さらに社会経験までを活用し、過去の経験に助けられながら臨地実習では受け持ち患者への看護に活かしながら、新しく看護を学んでいる社会人経験学生の様子が見いだされた。

3. 社会人経験学生の語りから抽出した、経験を反省し再構成に繋げた語り

一方、場面や内容によっては過去の経験をそのまま用いるだけでは、適切な看護に至れないことに気付いてゆく様子が語られた(表3)。そこで、これらの語りを「経験を反省し再構成に繋げた語り」として整理した。インタビューを分析した結果、【これまでと違うコミュニケーション】【前職での仕事を思い返す】の2カテゴリーが形成された。

1) 【これまでと違うコミュニケーション】

協力者の中には、これまでの社会経験で培ってきたコミュニケーションがそのまま臨地実習でも通用すると思って患者に臨んだ結果、それを見直さざるを得ない状況に陥った様子が語られていた。それを【**これまでと違うコミュニケーション**】と命名した。その下位カテゴリーには、<コミュニケーションが

表3. 経験を反省し再構成して看護を学んだ語り

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	ID
これまでと違うコミュニケーション	コミュニケーションが全く分かってなかった	コミュニケーションはそれなりに出来ると思っていたが、実際は全く分かってなかったのだと反省する。	N1
		コミュニケーション能力があると思うことがデメリット。	N1
		これまでが全然通用しない。手術の後の人とか普通にお店に来る人と違う。患者さんへのコミュニケーションが全然わかってなかった。	N1
	患者へのコミュニケーションはこれまでと違う	実習に行つて、今まで考えたことが無かったことがコミュニケーションのことで、患者さんの気持ちになることが難しかった。	S4
		コミュニケーションが出来て当たり前みたいに思われるが、看護のそれは前職と違う。	S5
気遣うばかりでコミュニケーションになっていなかった	患者さんとちゃんと喋らないといけないか先生に言われないようにしなければならぬとか、考えていた	S5	
	教員から「あなたがハッキリと思いを言わないと」って言われた。自分が何処かで、気を遣ってた気がついた。	S5	
前職での仕事ぶりを思い返す	先のことまでは考えられていなかった	「その人のその先のことを考えたら」っていうふうに、深くまで追求してもらったお陰で分かっていた。	N3
		ムセたらどうなるのかとか、その先のことまでは考えられていなかった。	N4
	ただ実践していた	どういうふうにしたら結構食べられるとか、介護の時はただただ口を持って行つてた。	N4
		ケアワーカーの時は(自分の)生活をしてゆくためにしかご飯や排泄の援助をしてなかった。	N6
		ケアワーカーとして働いている時は患者が亡くなくてもあまり感じなかったことを(実習の受け持ち患者の死を通して)感じさせてくれた。	N6
	経過や根拠の理解が求められる	「この人はこういう経緯やから、こうか?」とか、情報としてだけではなく、これまでの経歴も見て理解するようにした。	N1
介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかる。根拠を合わせてゆくところに葛藤があって、うまく進まずにいた。		S5	

全く分かってなかった>、<患者へのコミュニケーションはこれまでと違う>、<気遣うばかりでコミュニケーションになっていなかった>の3サブカテゴリーが見出された。

<コミュニケーションが全く分かってなかった>では、「コミュニケーションはそれなりに出来ると思っていたが、実際は全く分かってなかったのだと反省する。(N1)」ことで、そもそも社会人経験者だからと自分自身に「コミュニケーション能力があると思うことがデメリット。(N1)」なのだ、との思考に繋がっていった。また、「これまでが全然通用しない。手術の後の人とか普通にお店に来る人と違う。」と述べ、「患者さんへのコミュニケーションが全然わかってなかった。(N1)」とも振り返っている。

<患者へのコミュニケーションはこれまでと違う>では、「実習に行つて、今まで考えたことが無かったことがコミュニケーションのことで、患者さんの気持ちになることがなんか難しかった。(S4)」と、改めてコミュニケーションについて考えるきっかけになった様子が語られていた。

<気遣うばかりでコミュニケーションになっていなかった>では、「患者さんとちゃんと喋らないといけないとか、先生に言われないようにしなければならぬとか、考えていた。(S5)」や、「教員から『あなたがハッキリと思いを言わないと』って言われた。自分が何処かで、気を遣ってた気がついた。(S5)」

と、コミュニケーションの目的を見失ってはいけないと教えられた、と語っていた。

2) 【前職での仕事ぶりを思い返す】

1) はコミュニケーションに特化した語りであったが、ここでは援助を行う上での心構えや視点について見つめ直すに至った様子が語られた。そこでこのカテゴリーを、【前職での仕事ぶりを思い返す】と命名し、サブカテゴリーとして<先のことまでは考えられていなかった><ただ実践していた><経過や根拠の理解が求められる>の3つが構築された。

<先のことまでは考えられていなかった>では、「『その人のその先のことを考えたら』と、臨地実習指導者(以下、指導者)から追求してもらったお陰で分かっていた(N3)」ことや、「ムセたらどうなるのかとか、先のことまでは考えられてなかった(N4)」といった語りがあった。

<ただ実践していた>では、「どういうふうにしたら結構食べられるとか、介護の時はただただ口を持って行つてた。(N4)」や「ケアワーカーの時は(自分の)生活をしてゆくためにしかご飯や排泄の援助をしてなかった。(N6)」などから、とにかくは目の前の業務をこなすことに必死であったことが語られていた。

<経過や根拠の理解が求められる>では、「『この人はこういう経緯やから、こうか?』とか、情報と

してだけではなく、これまでの経歴も見て理解するようにした。(N1)や、「介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかる。根拠を合わせてゆくとところに葛藤があって、うまく進まずにいた。(S5)」では、前職のやり方のままではいけないとの気付きと、直ぐには変えられない葛藤が語られていた。

Ⅵ. 考察

本研究の目的は、社会人経験学生が臨地実習において用いる、経験の実態を明らかにすることであった。それに対して、社会人経験学生が臨地実習において受け持ち患者への看護を学ぶ上で、妊娠・出産、子育てや前職からの経験がどのような役割を果たしているのかがデータから示された。以下では、得られた結果をもとに、文化心理学の知見を用いながら考察を進める。なお、学生側の学びと教員側の支援に分けて考察を行う。

1. 経験を用いて学ぶことの妥当性—ヴィゴツキー・トライアングルを用いて—

今回は社会人経験学生に対して、特に臨地実習において看護をどのように学んでいるのかをインタビューした。その結果、表2の「経験をそのまま活かして看護を学んだ語り」に分類したように多くの協力者たちは、過去の経験と結びつけながら、看護を理解・学習しようとしていた。つまり、意図的(時には恣意的)に過去の経験を活用していたのである。

過去の経験を意図的に活用する心理的プロセスを理解する上で、ヴィゴツキー・トライアングルを用いて考察する。例えば、子育て経験を持つ社会人経験学生 N4 は、「小児実習では、受け持ち患児が何が好きか、何に興味を持っているか、我が子が辿ってきた道なので活かすことができた」と語っていた。これを、主体(学生 N4)から客体(受け持ち患児)への目的(入院生活における患児らしい生活)を達成する際に、何らかの記号(学生 N4 の子育て経験)を媒介させたと考えることが出来る(図2)。

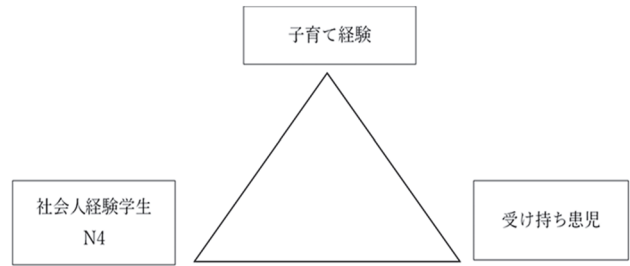


図2. 子育て経験を持つ社会人経験学生が過去の経験を活用する過程：図1を援用

言語学の立場から藤井(2016)は、「ヴィゴツキーの三角形では、行為が対象に向かうということだけではなく、言語との関わりの中において行為が形成されていること、また記号は自然に生まれたものではなく、歴史的社会的な人間の関わりの中で生まれたことを意味している」と述べており、主体が言語を用いることで客体に何らかを伝えられることを示している。従って社会人学生が妊娠・出産・子育てや前職からの経験を用いることで、臨地実習で看護を実践したり学んだりしていることを、ヴィゴツキー・トライアングルによって説明できると考えられる。ここで用いられる経験とは、社会人経験学生がこれまで歩んできた道程から立ち昇ってくるものであり、その人の個人史において生み出されたものに他ならない。

しかし、社会人看護学生であっても、過去の経験そのままの活用だけではうまく適応できず、問題点が生じる場合も確認された。次節ではそういった場合における学びについて述べる。

2. 経験を見直し、再構築するための反省

協力者の語りから、【これまでと違うコミュニケーション】と【前職での仕事を思い返す】がカテゴリーとして生成された(表3)。社会人経験学生は往々にして「コミュニケーション力がある」と思われがちである。実際に、先の高橋(2013, p.26)の研究結果においても、社会人経験が学校生活の中で活かされていると感じたことが多かった項目として、【対人関係】の中でも「コミュニケーション」が挙げられていた。しかし、本研究で明らかになったように、社会人経験学生であっても実際の患者とのコミュニケーションについては、それまでと同じ方法

では通用せず、困難に突き当たっていた。具体的には、健康である人とそうでない人への接し方の違いについて、であった。かたや、【前職での仕事ぶりを思い返す】に関連しては、援助の対象となる人の先のことや根拠までを考えず、ただ実践だけをしてきたこれまでの仕事ぶりが、看護の学びに影を落とす一因になっていた。

以上のような気づきに至った理由としては、表3においてN3が「(指導者や教員から)深く追求してもらったお陰」と表しているように、指導者や教員とのやり取りを通した、反省 (reflection)⁶⁾ を経ていることが大きいと考える。なお、看護では反省をリフレクションと表現することが多いが、自己の心理過程に対する内省のみでなく、関係的で、身近なものである (Paker, 2008; ハッ塚による訳注を参照) ことから、本論では反省という訳を採用する。看護で用いる反省とは、「内省、省察、熟考、反省して得た感想・意見・考え」(勝野, 2017) といった意味合いを含んだ概念である。また、「看護師という職業に必要な考え方や判断基準を理解するには指示的な指導ではなく、十分な自己省察の時間を作るなどの対応が効果的」(渡邊他, 2013) だと述べられている。先述したN3の語りからも、指導者や「教員との対話は (思考するための質問の投げかけ) によってリフレクティブなスキルの活用と修得を促進できるといわれている」(勝野, 2017) ことが示唆された。このように反省を促した結果、協力者たちはこれまでの経験を見直し、自らの捉え方を再構築した後に再び患者に向き合おうとしていったのである。

さて、反省による経験の見直しについて、文化心理学ではどのように説明することが出来るだろうか。文化心理学者のヤーン・ヴァルシナー (Jaan Valsiner; Valsiner, 2013) は次のように述べている。

6) 反省とは「経験を問い直すこと。ある出来事がいかにして自分の感じたかたちに来上がっていったかを関係の中で問うことである」(Paker, 2008)。それは「研究者としての自分が、ひとつの制度の中でどんな立場に置かれているか。そしてそこには、研究活動の歴史的な背景や、研究における個人的側面がどのように影響を及ぼしているか。これらの問題に注意を払うこと」(Paker, 2008) である。パーカーは、質的研究法という文脈においてこの語を説明しているため「研究者」について述べているが、これは社会人経験学生の経験の反省に置き換えることもできると考えられる。

人は「置かれた活動文脈」に浸っているアクター (行為者・演者) であると同時に、浸っているその場面から距離化する内省的なエージェントでもある。この二重性は、今-ここの文脈に適応するための必要に縛られず乗り越えるために適切であり、自律性を増大させる発達へとガイドする。しかし、どのような自律も、今-ここの文脈への直接的な依存の結果なのである (生物学的であれ、心理的であれ、社会的であれ、いかなる発達するシステムにも伴う開放系的な性質として)。(Valsiner, 2013, p.18)

ここでヴァルシナーは、心理的距離化はその人が「今-ここ」にいる文脈に依存して行われていること、記号的媒介という手段によって「今-ここ」の文脈から距離をとるということを指摘している。言い換えれば、「今-ここ」の文脈を反省するためには、そこから距離をとる必要があり、そのために記号的媒介が不可欠であるということである。これを社会人経験学生の語りから述べると、次のようになる。患者に対して看護を提供した際にN1, N3, N4の語りにあるような、これまでの経験をそのまま適応しても受け入れられない場面に遭遇して初めて、それでは通用しないことに気付く (今-ここでの経験)。さらに、指導者や教員からの問い掛けや患者の拒否的な反応があることで、社会人経験学生は立ち止まざるを得ず、反省に移っていく。表3に見られる「あなたがハッキリと思いを言わないと」や「その人のその先のことを考えたら」は、社会人学生の経験の反省を促す記号的媒介の例である。ここで、反省が迫られるような経験において、どのように記号が用いられたかを検討することで、学生の成長過程をより深く理解することができると考えられる。そこで次節では、ヴァルシナーの文化心理学を用いることで記号の観点から社会人経験学生の経験についてより精緻に考えてゆく。

3. 経験の種類を記号論的視座から見直す - ヴァルシナーの点的記号と域的記号

本節では、「記号」という観点到焦点をあて、社会人看護学生の経験の活用について考察する。特に、

ヴァルシナーの文化心理学に基づく考察を行う。

ヴァルシナーの文化心理学は、「動的記号過程の文化心理学」(cultural psychology of dynamic semiosis; Valsiner, 2016) と表現される。ヴァルシナーの文化心理学の特徴は、サトウ (2019) によれば、2点挙げられる。第1に、「記号を考える際に時間を取り入れることが重要だとし、心理的プロセスとしての記号過程を重視 (サトウ, 2019, p.35)」していることである。第2に、「記号が表象する内容には2つの形式があり、1つは点的 (point-like) 記号で、もう1つが域的 (field-like) 記号 (サトウ, 2019, p.50)」と区別されることである。

ヴァルシナーの文化心理学は、ヴィゴツキーの「記号論的」文化心理学を拡張したものである。そのため、記号論について概略を述べる。「文化心理学の基本は『記号』」(サトウ, 2019, p.27) にあり、その記号を扱う「記号論は記号とその使用に関する科学である」(Valsiner, 2013, p.38)。記号論はチャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) によって提唱された考え方である。パースは記号を「心に対して、他のものをあらわす対象」(Peirce, 1873/1986) だと言った。それを受けてヴァルシナーは、「記号は心によって作られ、心は記号を通じてはたらく。それゆえ、記号は外的環境における対象と結ぶことを通じて、われわれがわれわれ自身と関係する、洗練されたツール (Valsiner, 2013, p.28)」だと述べている。ところで、一般的な記号のイメージとしては、数式や音楽などで用いられるものを思い浮かべるであろう。しかしサトウ (2019) が言うように、記号には文字や単語、表情や動作なども含まれる。また、ヴァルシナーは人間の経験も記号として捉えている。この記号について、ヴァルシナーは、個々が遭遇した何らかの経験を表現する方法として、文字や数字として表す「点的記号」と、経験後に湧き上がる感情などの非定型的な「域的 (フィールド的) 記号」を区分している (Valsiner, 2013)。

これを、本研究に置き換えて考えた場合、点的記号は、比較的容易にこれまでの知見の援用が可能な経験に基づく記号に相当する。具体的には、「小児実習では子育て経験を活かして、難しい思春期の子どもを担当し、その関わり方が褒められた (N9)」は、

子育て経験の援用が、無理なく行われたので、患者にもスムーズに受け入れられたものである。これは、「子育て経験」という経験の同一性を根拠とした記号であることから、点的記号と考えられる。

一方の域的記号は、繁体的で複雑に主体と客体の間を往来する自己内対話が避けられない種類の記号に相当する。例えば、「介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかる (S5)」といった語りは、協力者が経てきた経験の吟味が何度もされる中で葛藤が生じ、解決するまで自己内対話が続けられた様子を表している。これは、「介護」の経験と「看護」の学びがただちに結びつかず、状況と自己との間でやり取りが不断に繰り返される域的記号と考えられる。S5は結果的に己の経験に縛られることなく、柔軟に反省し再構築できた途端、患者との関係性が進展した。その結果、自己の成長や変化を促進させる記号に置き換わったのである。これは、ヴァルシナーのいう「促進的記号」(サトウ, 2019, p.36) に他ならない。

このように、過去の経験そのままの型での援用を示す点的記号と、葛藤や自己内対話を伴う反省を経て、経験を再構築することで新しい意味を見出すことに繋がるような域的記号の両者を用いながら、社会人経験学生は看護を学んでいることが明らかとなった。

4. 社会人経験学生の気づきを促す - 記号論的罠からの脱出に向けて -

文化心理学では「自分自身が自分との関係でコミュニケーション不全を起こしてしまうこと (サトウ, 2019, p.47)」を記号論的罠 (semiotic trap) と呼ぶ。これは「簡単にいうと思込みのようなこと (同)」である。本研究に置き換えると、安易な経験の踏襲は、看護がこれまでの経験と同一だと思込むことによる、「記号論的罠」を作り出し、看護で求められる「記号」との不適合を招くことがある。これによって、学びを止める事態を招くことがある。

しかし協力者たちは、記号論的罠から抜け出せた様子をも語っていた。具体的には表3にまとめたように、これまでのコミュニケーションでは通用しなかった体験を通して【これまでと違うコミュニケー

ジョン】の必要性に気付かされたこと。または、行うケアの意味や影響に思いを馳せ、【前職での仕事ぶりを思い返す】ことで自分の取り組み方を変えていったこと、などである。さらに重要なのは、気付きのきっかけは指導者や教員からの問い掛けに始まることである。「あなたがハッキリと思いを言わないと（S5）」との指摘や、「あなたの行動目標はなんなの？（N3）」といった、指導者や教員からの指摘や問い掛けによって自己洞察を深め、結果として自らのケアを修正していったのである。

「経験と教育」を記した教育哲学者のジョン・デューイ（John Dewey, 2004）は、「すべての経験が本当に教育的なもので、またすべての経験は同等なものであるということの意味するものでない」と述べており、安易な経験の活用に警鐘を鳴らしている。デューイ（1955）は、reflective（反省的）な視点を反映させた「反省的思考態度とは精神の内部に思考の問題を見だし、この問題を重視し、この問題を連続的に思考するもの」と定義し、優秀な思考態度であるとしている。なお、デューイは、「ある行動に対応して生じた帰結から翻って（reflect）、この二つの別々な事柄をふり返ってみる（reflect）というわれわれにおける変化」を厳密な意味での省察（reflection）と考え、その二つの事柄が一つに結びつけられて「意味」が成立するとしている（吉村・竹山・日下, 2014）。このような、逡巡しながらじつくりと己と向き合った結果に見出される看護こそ、一層の価値があると考えることが出来る。

本稿冒頭では、教員が社会人経験学生の経験を否定的に見ていることを確認してきた。つまり社会人経験学生にとって前職の経験は看護を学ぶ上では必要無いものであったり、学びを邪魔する要素と捉えられたりしてきた。しかし経験は、そのまま活用（点的記号）しても十分に看護を学ぶ上で有益なものであることから、教員はその重要性を理解するべきである。一方で、経験をそのまま活用することが、看護で求められる記号との不適合（記号的罫）が生じているような場合は、反省を促すことが欠かせない。記号的罫に陥った時に、そこで社会人経験学生は立ち止まり、逡巡を繰り返すことで漸く自らを見直す。その時に教師や指導者からの働き掛けがきっかけと

なり、これまでの経験から距離を置き、自己内での不断の対話（域的記号）を経て、経験の再構築に至ることが出来る。これを反省のプロセスと考えることが出来るのではないだろうか。本研究の協力者の語りから、このような反省による看護の学びも見出された。サトウ（2019）は、域的記号について「新しい意味を創造する機能をもちます」（p.50）と述べている。困難を抱えている学生が、自分が陥っている状況に気付け、それを反省のプロセスに活かせるような具体的な問い掛けや指摘を行うことが、教員の役割である。そのような学びの手掛かりさえ得られれば、進学動機が堅固な社会人経験学生は、むしろ積極的に過去の経験から学んでゆくと考えられる。このように経験に対する建設的な関わりが、教える側には求められていると考える。

VII. まとめと結論

18名の社会人経験学生の語りから、臨地実習場面に焦点を絞り、それまでの経験（特に社会人経験）でそのまま看護に活かされたものはどのようなことで、そうでない経験についてはどのように対処したのか、あるいは支援が求められるのかを整理した。

1. 社会人経験学生が経験をそのまま活かした看護には、【妊娠・出産、子育て経験が活きる】【高齢者看護が入りやすかった】【前職と共通する技術や働く姿勢は活かす】の3つがあった。これらは社会人経験学生が過去の経験を意図的に用いて看護を学んでいることを示している。そこで、ヴィゴツキー・トライアングルにおける記号・道具の位置に経験を位置づけることで、社会人経験学生が看護を理解する際や患者への看護実践をする際のプロセスを説明することが出来た。

2. 一方で、経験を反省し再構成する必要性に気付いた語りとして、【これまでと違うコミュニケーション】【前職での仕事ぶりを思い返す】の2つがあった。こうした経験については、上述のヴィゴツキー・トライアングルだけではなく、ヴァルシナーの記号論的文化心理学も用いて考察した。つまり、経験をそのまま用いることで看護を学べたり実践できたりする点的記号としての学びと、過去の経験と同じ型の

ままでは適切な看護への適応が難しく、反省により経験を再構成することで看護を学ぶ域的記号としての学びに、分類することが出来ると考えた。

3. 安易な経験の踏襲は、看護の学びにおいて「記号論的罣」を作り出すことがある。しかし、指導者や教員からの指摘や問い掛けをきっかけに反省に取り組むことで、記号論的罣から抜け出せていた。その結果、コミュニケーションのあり方や看護としてのケアについて気付くことが出来ていった。

結論として、教育は相互作用であることから、学べ側のみならず教える側にも変化が求められる。具体的には、成人学習の視点を持って社会人経験学生の経験を認めながらも、その質を見極めること。そして、社会人経験学生の反省を促すような、具体的に適切な指摘や問い掛けを行うことが学習支援に繋がることの示唆を得た。

VIII 研究の限界と今後の課題

本研究では、社会人経験学生と社会人看護師の両者にインタビューを行った。本研究の限界として、現役生としての振り返りと、既に看護師として数年勤務している立場から学生時代を振り返っての語りについて、内容比較を行っていないという点がある。ただし、現役生だからこそ鮮明に覚えていることと、臨床に出て勤務し始めたからこそ分かることもあると考えられる。そのため本研究では、ある側面では、社会人看護学生における経験の活用を多面的に描き出すことができたと考えられる。今後は、協力者の背景を絞っての分析・考察も検討すべきと考える。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生および看護師の皆様へ深く感謝申し上げます。

引用文献

天野道代・大見サキエ (2019). 社会人経験のある学生が看護師に転職する動機と学びつづけている現在の思い. 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌, 第四号, 37-46

- Dewey, J. (1933). *How We Think*/ 植田清次訳 (1955). 思考の方法 - いかに関われわれは思考するか -. 東京: 春秋社 (p.3)
- Dewey, J. (1938). *Experience and Education*, The Macmillian Company/ 市村尚久訳 (2004). 経験と教育. 東京: 株式会社講談社 (p.30)
- 藤井知弘 (2016). 言語機能からみる学びの三角形. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要. 第15号, 1-6
- 一般社団法人 日本看護学校協議会 (掲載日不明). 日本看護学校協議会ホームページ. 「社会人経験者の入学に関する事」 <http://www.nihonkango.org/exam/index.html> (2020年8月3日参照)
- 神谷英司 (2006). ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について (II). 佛教大学社会福祉学部 社会福祉学部論集, 第2号, 19
- 片山美穂・長谷川雅美 (2017). 看護専門学校に在学する社会人学生の学校生活に対する意識の構造について. 看護実践学会誌, Vol.29.No.2, 31-39
- 片山美穂・鈴木(谷保)由依子・長谷川雅美 (2017). 看護専門学校に在学する看護教員の意識の構造について. 看護実践学会誌, Vol.30.No.1, 9-17
- 勝野とわ子 (2017). 第2章 対人関係の振り返り 3. リフレクション. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕, 金壽子 (編), 基礎看護技術 (p.33). 東京: メディカ出版
- 川島大輔 (2018). ライフストーリー・インタビュー. 能智正博 (編集代表), 質的心理学辞典 (p.312). 東京: 新曜社.
- 三木隆子・關戸啓子・檀原いづみ (2015). 3年課程看護専門学校の社会人学生と教員のもつ「学習および学習支援」に関する認識の違い. 四国大学紀要 (A) 45:35-48
- Parker, I. (2004). *Qualitative Psychology: Introducing Radical Research* (First Ed.), Open University Press./ ハツ塚一郎訳 (2008). ラディカル心理学 - アクションリサーチ入門 - (初版). (pp.35-50). 京都: ナカニシヤ書店.
- サトウタツヤ (2015). 心理学の名著 30. 116, 東京: 筑摩書房.
- サトウタツヤ (2019). 第3章 記号という考え方. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編). 文化心理学—理論・各論・方法論. (p.25, 50) 東京: 株式会社ちとせプレス.
- 高田葉子・鈴木由美 (2014). 社会人経験のある看護学生についての文献レビュー. 桐生大学紀要, 第25号, 47-56
- 政府統計の総合窓口 e-stat 看護師3年課程入学者の年齢・学歴推移 (2010～2019年度).
- 高橋隆子 (2013). 社会人経験をもつ看護学生の体験に関する実態調査. 神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要, 25-29
- 高野真由美 (2013). 社会人経験をもつ看護学生の理解と支援 - 看護への志望動機と就学上感じる困難について文献からの検討 -. 川崎市立看護短期大学紀要, 22巻,

37-45

徳田治子(2004). ライフストーリー・インタビュー. 無藤隆, やまだようこ, 南博文, 麻生武, サトウタツヤ編, ワードマップ 質的心理学 (pp.2-245). 東京: 新曜社.

Valsiner, J. (2007). *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology*. / サトウタツヤ 監訳 (2013). 新しい文化心理学の構築 <心と社会> 中の文化 (初版). 東京: 新曜社 (pp. 28-39)

Valsiner, J. (2016). *An Invitation to Cultural Psychology*. SAGE.

渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝 (2013). 看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感. 第43回 (平成24年度) 日本看護学会論文集 看護教育, 106-109

吉村文男・竹山理・日下耕三 (2014). デューイの教育哲学における「経験」と今日の大学教育. 奈良産業大学地域公共学総合研究所年報, 4, 85-108.

(2020. 8. 3 受稿) (2021. 3. 19 受理)

(ホームページ掲載 2021年4月)